

■ ブラジルのアウグスト・ボアール(1931-2009)が編み出した「被抑圧者の演劇」

「被抑圧者」＝社会的に抑圧されている人たち

ボアールが言う抑圧「納得できない理由により、自分の意思に反して、《言いたいことが言えない、やりたいことができない、やりたくないことをやらされる》などして、いやな思いをさせられる状況」

→誰もが多少かれ少なかれ「抑圧」されている

自分たちの状況を意識して(意識化)、それを主体的に変えていくために知恵を出し合う対話型の手法

個人的な問題は、社会的な問題につながっている

(個人的な体験を出し合う→複数の人が共感・共有するような体験を表現していく、という形でコミュニティの問題や社会問題に取り組んでいく)

・教育学者パウロ・フレイレ (『被抑圧者の教育学』『伝達から対話へ』) とのつながり

■ 「被抑圧者の演劇」の代表的な手法の1つ「イメージ・シアター(彫像演劇)」

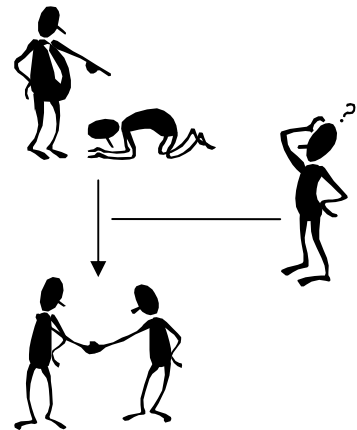
発祥＝1970年代のペルーの国家的な識字教育プロジェクトにボアール関わった

各地から集まった参加者は、先住民族の言語などが多様で、共通言語がなかった

→お互いの状況を伝え合う際の、ことばに代わる手段として、ポーズを取った人を並べて、静止した場面で表現することにした

(image = 画像、映像、彫刻など形のあるもの theater =演劇)

・その場面にいる人たちの「気持ち」と「関係性」を表現しやすい



■ 基本的な進め方

場面を作る (ここまでなら「静止画」と同じ) → 「展開」させる

・作る場面 問題(抑圧)が起こっている現状の場面 「こうなっている」

↓ 問題を解決するために必要な行動を起こしている場面 「こうする」(解決策)

問題が解決した望ましい状況の場面 「こうなってほしい」

・「展開」・・・ 「ポーズを取っていると感じる気持ち」を元に動いたり、観客の解釈を交えて、動きや言葉のやり取りを展開させていく

ことばを使わない表現→「観客」の解釈が多様になるかもしれない。「そういう見方もあるのか!」と、「誤解」も解釈の幅を広げてくれるものとして積極的に活用し、観客も参加しながら進める

展開例・各登場人物それぞれの解釈で「ポーズを取っていると感じる気持ち」を元に動いてもらう

- ・観客が、登場人物の中で共感する人物の隣で同じポーズを取り、気持ちを想像してひとこと言う
- ・登場人物以外にどんな人物がいるか想像して、観客がそのポーズを取り、ひとこと言う
- ・起こっている「問題」を、観客が「こうなってほしい」と思う状況に変えてみる、など